

# 新龍樹伝 の 研究

寺本婉雅

*Teramoto Enga*



本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

## 凡例

- 一、本書の底本には、寺本婉雅『新龍樹傳の研究』（大正十五年三月、中外出版）を用いた。
- 二、閲読の便のため、底本に対し、次のような整理を加えた。
  1. 旧字・旧かなづかいを新字・新かなづかいに改めた（一部例外あり）。
  2. 漢字の使用、送りがな等は、現行通用の用字用法に改めた。
  3. 明らかな誤記、誤植は訂正した。
  4. 難読と思われる漢字には振りがなを付した（基本初出のみ）。
  5. 一部の読点を句点に変更した。
  6. 表記ゆれは最も頻出の表記に統一した。
  7. 割註は小書きの一行書きに変更した。通常の括弧書き、小書きの括弧書きの区別は原文ママ。
  8. サンスクリット等のローマ字表記において、*C. g*（セディーユ付きC）を、現行の転写慣例に従い、*ṣ. s*（アキュート付きS）に改めた。
- 三、「」内は底本には存在せず、編者によって付加されたものであり、編者による註記の外、読み下し文、和訳文に用いた。
- 四、「\* a」～「\* g」は編者による註記であり、巻末に編註としてまとめた。

五、簡易な註記、補足等は、「」で括って本文中に挿入した。

六、原文において、漢文のみで読み下し文のないものには独自に読み下し文を付加した。その際、最も標準的と思われる読み下し方を採用した。そのため、原文の返り点通りに読み下していない場合がある。

七、外国語文で和訳のないものには和訳を付した。

八、「龍猛菩薩画像の解説」を「龍猛菩薩画像」の直後に移動した。

九、目次は原文通りではなく、本書に合わせて改変した。

十、原文ではチベット語のローマ字転写について、(ワイリー方式などと異なり)大文字と小文字が混在する著者独自の表記法が採用されているが、本書ではこれに倣った。この独自の表記法について、著者は『西蔵語文法』において次のように述べている。

「〔備考〕西蔵文字の羅馬綴に就て——西蔵文字を羅馬綴に書写する場合には恒に発音すべき語根のみを華文字にて写し、添前詞、添後詞、添重後詞は文法上時々変動して発音せるとせざるに依り何れも細字にて書写すべし。発音の最も困難なる西蔵文字を写すには、斯く華文字と細字とを以て写し分けることに由て一目の下に発音すべき語根を容易に見出すを得べし。若し然らずして英語の如く頭初より細字又は同一の太さの文字にて写すときは、その語根の何れなるや、添前詞又は添後詞の何れなるやを見分くるに困難なるのみならず、かく同様の文字にて写

すが如きは西藏文典に通せざるの致すところなりと云うべし」(寺本婉雅『西藏語

文法』平樂寺書店、昭和十五年、p.20)

原文では上記の規則に加えて、「ただし接尾辞は小文字で表記する」(-pa, -po, -hi など) という規則があると推定される。しかし一部の接尾辞は例外的に大文字のままである (-Bu, -Su, -La, -Bahi など)。以上を踏まえて、原文において、これらの規則に則っていない場合は誤記と判断し、修正している。

# 新龍樹伝の研究

寺本婉雅



龍猛菩薩像

( 京都教王護国寺蔵  
国宝・弘法大師筆 )

## 龍猛菩薩画像の解説

この龍猛菩薩画像の口絵は京都真言宗東寺所蔵（国宝）の七祖像中の一鋪で、弘法大師真筆と称せられ、「国宝全集」第二十集より転載す「\*a」。画像に向かって右上隅には飛白体にて「梵号」と書き、その下にナグハラシュダと悉曇字を記入し、左上隅には飛白体にて「漢翻、龍猛菩薩」と書いてあり、このナグハラシュダとは正しく龍樹の梵名ナーガルジュナの誤写であることは一見して認めらる。悉曇字ナグハラシュダの中にて、グハと、シュと、ダとの三字の誤写の討検については、この画鋪を模写したる「阿叉羅帖」と、大師真蹟「三十帖冊子」と法隆寺伝来貝多羅葉心経の淨嚴和尚写本とに対照すれば明瞭となる。従つて正韻ナーガルジュナは龍樹と訳すべきも、龍猛とは訳出しうべきものではない。ましてナグハラシュダとは何を意味し、何人の固有名詞であるかは不明である。〔著者誌〕



## 序

釈尊の菩提樹下における正覺成道の體現は、梵我一如の幻滅的厭世宗教を否定し、神人二元的奴隸宗教の不合理を絶叫し、真理體現としての覺者、人間に即する神の実現を示し、超我に対する全的歸命の正法、動乱無窮の実人生に即する自然法爾隨順の大道を開顯したもうた。かかる原理生命觀によりて当時印度社会に行われたる一切の秘密呪法のごとき、梵に対する祈祷宗の絶滅を期せられた。そは阿含經中に明らかに密呪祈祷修法を嚴禁せられてゐるのはこれを証とすべきである。

西曆一世紀半時代に龍樹菩薩出でて、原始仏教の真意が幾多の部派的教學のために蔽掩せられたるを慨し、復興思想を鼓吹し、一乗即大乘法を宣伝し、大乘仏教思想の開拓者であると称せらるるに至った。龍樹は「中論」をもってその思想大系とすれば、純仏教の外何ら秘呪的思想を有せない、大智度論には般若皆空の妙義を直觀せしめんがために般若經の声字陀羅尼門を継承し、非思量底の思想を言語音声を借りて表現せしめたに過ぎないから、もとより呪法に比すべきではない。しかるに後世龍樹をもって顯密二教の主唱者であるかのごとく見なし、龍樹は仏の懸記に應じて出現したるものなりとして、入楞伽經のごときものが現われ、かくて龍樹は顯密二教の八宗の祖師として崇敬せられている。されど今ここに余は從來

よりのこれらの説を否定すべき多数の新史料を発見し、龍樹に同名異人の二人あり、そは西曆一世紀半時代の古龍樹と、西曆五世紀半年代の新龍樹とである。前者は純仏教の復興者で毫末も密教的色彩を帯びていないが、後者の新龍樹は密教の主唱者で、坦特羅仏教の宣伝者である。この他古龍樹の弟子に龍猛（ナーガーフヴァヤまたは龍叫）なるもの出で、古龍樹の法生二身論の外に法、報、応三身論の著書をもって淨土教を唱説し、梵藏両訳の「入楞伽經」中の仏懸記に應じて出現したることと、かつまた新龍樹の著書として六十六種の密教に属する膨大なる坦特羅乗の論部を発見したのである。その他「新龍樹伝」、「新龍樹伝の疏」、「龍智伝」、「龍智伝の疏」など新史料の現存する以上は、古龍樹の外にさらに新龍樹の別人の存在したる史実を到底否むことの不可能なるを認めしめらる。よしやこれらの六十六種の密教論書が偽作であり、偽書であるとの想像を挟むべしとするも、強いてこれらを否定すべき何らかの適確なる新史料を提供せらるるにあらずば、新古二人龍樹と龍猛（また龍叫）との別人説を抹殺せんとすることは不合理であると思う。

以上のごとき新史料と思想内容とに基づきて余は本研究をまとむることとしたのである。なお史的龍樹伝については仏教史上重要な研究的対象であるから、世の博雅君士の御指教を仰ぎ、ますます精研の域に進みたいことを念願してやまないのである。本論を草するに際

し、柳「亮三郎」博士、泉芳璟、山口益、井上右近諸教授、美濃晃順氏等より種々の注意を蒙りてようやく結ぶを得たれば、ここに厚く謝意を表する次第である。

大正十五年二月十五日

京都紫野無隠庵にて

寺本婉雅識

# 新龍樹伝の研究 目次

凡例

龍猛菩薩像

龍猛菩薩画像の解説

## 序

古龍樹、龍猛、新龍樹等の史的関係の図系

## 緒言

## 第一章

(一) 古龍樹以前の大乗經典

(二) 古龍樹の出世年代

- (三) 古龍樹の名義について
- (四) 龍猛の名義について
- (五) 龍樹と龍猛の混同説
- (六) 楞伽經懸記の龍猛人名の起源
- (七) 龍猛または龍叫と龍友の關係
- (八) 古龍樹の思想と楞伽經
- (九) 古龍樹の出生地
- (一〇) 新龍樹の出生地
- (一一) 龍樹と羅睺羅跋陀羅の關係
- (一二) 羅睺羅跋陀羅伝の新古数人説
- (一三) 古龍樹時代の娑多婆訶王について
- (一四) 優陀延王と禪陀迦王との異同について
- (一五) 新龍樹に関する史料と年代
- (一六) 新龍樹教化の王名異称について
- (一七) 新龍樹と龍智との關係
- (一八) 龍智と金剛智との關係

(一九) 不空金剛と弘法大師の真言相承の異同

## 第二章

(一) 新龍樹伝の研究について

(二) 新龍樹研究の批評について

## 第三章

(一) 弘法大師の龍猛菩薩の画像について

(二) 弘法大師の悉曇学の韻訳について

## 付録

一、西藏所伝、新龍樹研究史料の和訳

(一) 新龍樹伝

(二) 新龍樹伝の疏

(三) 龍智伝

(四) 龍智伝の疏

(五) 羅睺羅伝

(六) 羅睺羅伝の疏

(七) 沙羅訶伝

(八) 沙羅訶伝の疏

二、西藏所伝、新古龍樹の著書目録

(一) 古龍樹の著書 (二十九種)

(二) 新龍樹の著書 (六十六種)

(三) 新阿利耶提婆の著書(九種)

(四) 龍智の著書(九種)

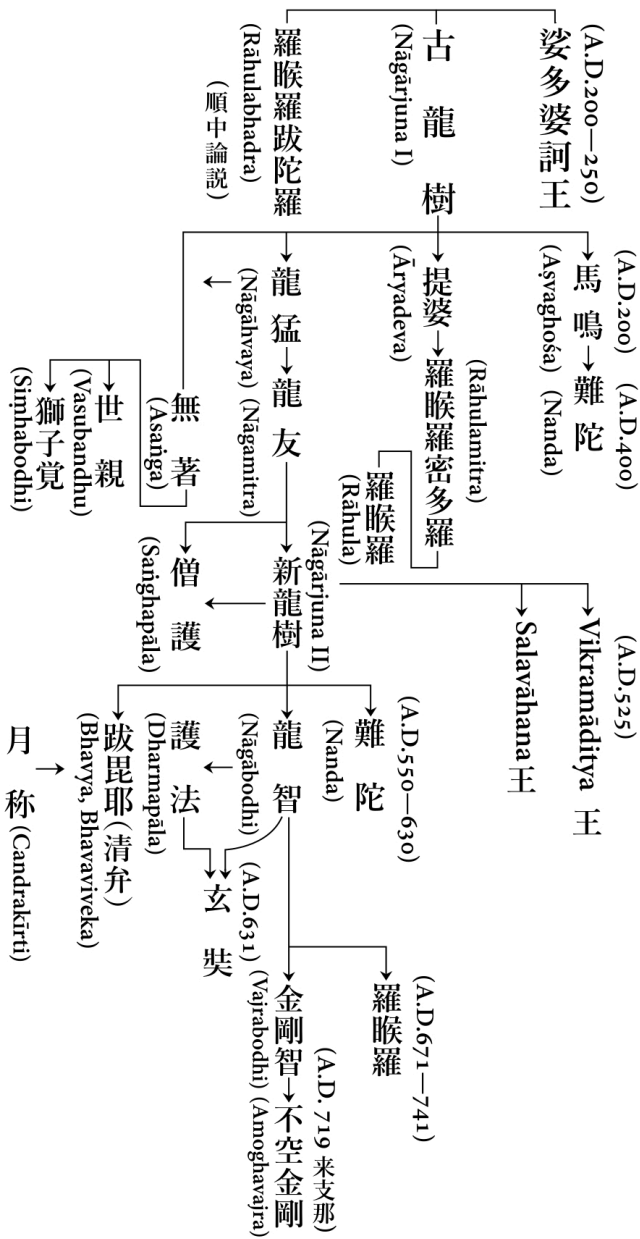
(付) 漢訳古龍樹の著書(十三種)

編註

著者略歴



（ただし古龍樹は顯教、龍猛は三身論著者、新龍樹は密教開祖）



# 新龍樹伝の研究

寺本婉雅 著

## 緒言

仏教史上、龍樹菩薩 (Bodhisattva Nāgārjuna) は大乘仏教の創始者であり、顕密両教の各初祖として尊仰せられ、印度、西藏、支那、蒙、満、朝鮮より日本仏教史に至るまでことごとく主要の位置を占めている。しかし印度仏教史、西藏仏教史においては大乘教の興起と、その唱導者は龍樹出世以前において既に大乘聖典の出現し、大乘を唱導するもの多く輩出した史料を残して仏教発達の芳趾を物語っている。西藏所伝の印度仏教史においては龍樹は新古二人輩出し、前者は西暦二世紀の出現とし、後者は西暦五世紀半頃の出現とす。古龍樹は顕教すなわち純仏教を、新龍樹は密教を宣揚せるものであることこれである。古来より大乘教の創始者を唯一人の龍樹なりと是認せる説を根底より転覆せしむるものであらう。

テンギユル

西藏大藏經丹珠爾部 (hStan-hGyur; 論藏) の中に、龍樹の名によつての著書「六十六種」を計算せられ得る。古龍樹の著書は二十九種あり、新龍樹の著書の中にその多数のものは曼特羅乘 (Mantrayāna) や、坦特羅乘 (Tantṛayāna) に属する真言密教の著書である。これによりて古龍樹以外の何人かの著作、あるいは仮名の龍樹の著書であらねばならぬとの疑惑を生ずるのである。げに「六十六種」の著書はことごとく「龍樹」なる名称を冠しているのであるが、その思想内容と、伝訳者の人名ならびに年代等より総合して考研すれば、どうしても古龍樹の外に新龍樹の存在、または仮名の龍樹が存在していたものとするより外に、これらの膨大なる著書はいかに選択し、峻別しえられようかという疑念の雲を払拭することはできない。余はかつて丹珠爾部よりこれらの書類を拾い集め、その研究の一端を大正三年七月二日発行の「密宗学報誌第十三号」に発表したことがある。

新古両龍樹説の根本史料としては梵藏漢三種の「入楞伽經」(Lankāvatāra-mahāyāna-sūtra) を対照研究するに、梵藏両訳は漢訳楞伽の龍樹の懸記文と相違せることに注意し、梵訳では Nāgāvayah sa nimna (彼の名は龍の叫び、龍の猛者、龍と呼ばれるものなり) とあつて、藏訳では klu-Bos; klu-Bod; klu-hBod. の対訳となつていて、龍樹 (Nāgārjuna) とはなつていないことを発見した。そして漢訳四卷楞伽すなわち「楞伽阿跋多羅宝經」(Lankāvatāra-mahāyāna-sūtra, A.D.443. by Guṇabhadra) には、この龍樹懸記の「偈頌品」は欠けているが、七巻と、十

卷楞伽 (Lankāvatāra-sūtra) とには懸記「偈頌品」が增補せられているけれど、この三伝の漢訳もなおまた梵蔵本とも經典の内容は、法、報、応の三身 (Dharma-kāya, Sambhogha-kāya, Nirmāṇa-kāya) 論と、阿頼耶識 (Ālayavijñāna) に関する八識論、または八九識論を詳述してある関係より考察するときは、「中論」(Prajñamūla-śāstra-tīkā, A.D.409. Kumārajīva「鳩摩羅什」の訳) や、「大智度論」(Mahāprajñāpāramitā-śāstra, A.D.402-405, Kumārajīvaの訳) を中心思想とする古龍樹と、入楞伽經の懸記「偈頌品」の龍猛または龍叫 (Nāgavayaḥ) とは、いかにしても異名同人とすることは妥当でないと思われるのである。

なおこの新龍樹説を成立せしむる新史料はその種類多数に上る中にて、丹珠爾部 (bs-tan-hgyur, Rgyud-hGrel. Lu, LXXXVI.) に編入せらるる主なるものは左の通り。

(一) 「成道八十四伝史」(Caturaśītisiddhapravṛitti, Grub-Thob bRgyad-Cu-Rtsa-bShiḥi Lo-Rgyus, Compiled by Abhavayadattaśrī, Lu, p.1-68<sup>b</sup>)

(二) 「成道八十四伝史疏」(Dohāvṛitisahita-caturaśītisiddhāvadāna, Grub-Thob bRgyad-Cu-Rtsa-bShiḥi Rtogs-bRjod Do-ha kGrel-pa Dañ-bCas-pa, Compiled by Virārab-hāsvara, Lu, p.68<sup>b</sup>-

(三) 「同史宝鬘」 (Rin-chen hPhen-Ba, Ratnamālā, Lo, p.114<sup>a</sup>-115<sup>b</sup>)

(四) 「成道八十四伝史誓願讚」 (caturaśītisiddhahayarthana, Grub-Tbob bRgyad-Cu-Rtsa-bShiji  
gSol-kDebs, Nu. LXXII. p.306<sup>a</sup>-330<sup>a</sup>. Compiled by Vajrāsana)

もし仮に Nāgārjuna と Nāgāhvaya とはいずれもその語義において「龍猛」と訳し得る異名人なりとするも、入楞伽經の三身論、阿頼耶八九識の「唯識論」(Vijñaptimātra-śāstra)系の者をもって「中論」思想中心の龍樹と同人なりとすることは到底不可能なることである。よしや世親(Vasubandhu)以後すなわち西暦四世紀以後の楞伽の懸記「偈頌品」の増補者が三身論(Trikāya-śāstra)や、阿頼耶唯識論(Ālayavijñapti-śāstra)思想をも古龍樹が唱導せしものたらしめんと擬して、南天出世の懸記を増補したるものなりと解せんとすると、梵蔵等の原典によって新史料が発見せられたる上は、かかる附会説はもはや梵蔵入楞伽經の被懸記者龍猛(または龍叫)をもって古龍樹なりとすることは到底でき得べからざることと考えるのである。いわんや時代を異にせる新古両龍樹の出現においてをやである。

以上の考察に基づいて新古龍樹の異同を、以下の項を追うて研究してみようと思う。

# 第一章

## (一) 古龍樹以前の大乗聖典

いわゆる古龍樹出世以前において既に無数の大乗聖典が世に流布せられてあったのであるが、龍樹出世地方には散逸して得られなかった事情より彼は諸国を遍歴し、幾多の大乗聖典を蒐集することができて、それらの無数の大小乗聖典を資料とし、大般若経 (Mahāprajñāpāramitā-sūtra) によって「大智度論」を著し、「八千般若経」(Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā-sūtra) に基づいて「中論」(Prajñāmūla-śāstra, A.D.409. Kumārajīva の訳) を著したのである。「大智度論」中に引用せる大小乗諸聖典は大約一百二十種ほどある中、阿含経が最も多数に引用せられているが、左のごとき大乗経典を拾い挙ぐるを得たことは、古龍樹出世以前においていかに大乗が盛隆してあったかをうかがい知せらるべきである。

- (一) 大阿弥陀経 (Amitāyus-vyūha-sūtra, A.D.25-220. Lokaraksā [支婁迦讖] の訳?)
- (二) 正法華経 (Saddharmapundarikā-sūtra. A.D.265-316. Dharmarakṣa [竺法護] の訳)
- (三) 毘摩羅詰経 (Vimalakīrti-nirdeśa-sūtra, A.D.384-417, Kumārajīva の訳)

(四) 般舟三昧經 (Pratyūpanna-buddha-sammukhāvasthita-samadhi-sūtra, A.D.25-220. Lokarākṣa の訳?)

(五) 無尽意經 (Akṣayamati-nirdeśa-sūtra, A.D.420-479 K-Yen [曇曜], Pāo-un [法勇] の共訳)

(六) 大悲經 (Mahākāruṇika-sūtra, A.D.550? Narendrayaśas [那連提耶舍] の訳)

(七) 十地論 (Daśabhūmika-śāstra, A.D.508-511. Bodhiruci [菩提流志] の訳)

(八) 華手經 (Kūśalamūla-paridhāra-sūtra, A.D.387-417. Kumārajīva の訳)

古龍樹の神話的伝説に、華嚴經 (Avatamsaka-sūtra, A.D.317-420, Buddhahadra [仏駄跋陀羅] 訳) を龍宮より将来したといえど、「大智度論」の中には「十地論」の外に華嚴經はさらに引用せられていないから、かかる伝説は信ずべくもないことである。

龍樹とほとんど同時代に大小乗の諸聖經が支那に將來せられ、各龍象によって翻訳せられたるものと、龍樹引用の諸聖典との一致せるものを列挙対照せば、龍樹以前より小大乘經が支那に東漸せしとともに、その訳經年代によりて龍樹の年代を推定せらるであらうと思うのである。(諸經の梵題は南條「文雄」博士の大藏經目錄による)

(一) 法句譬喻經 (Dharmapadā-vadāna-sūtra, A.D.265-316. Fā-kü [法炬] 訳)

- (二) 転法輪經 (Dharmacakra-pravartana-sūtra, A.D.25-220. Ān-shi-kāo [安世高] 訳?)
- (三) 梵網經 (Brahma-jāla-sūtra, A.D.384-417. Kumārajīva 訳)
- (四) 賢劫經 (Bhadrakalpika-sūtra, A.D.300. Dharmarakṣa [竺法護] 訳)
- (五) 盾楞嚴三昧經 (Śūraṅgama-samādhi, A.D.384-417. Kumārajīva 訳)
- (六) 諸仏要集經 (Buddhasaṅgati-sūtra, A.D.265-316. Dharmarakṣa 訳)
- (七) 正法華法 (前照)
- (八) 大阿弥陀經 (前照)
- (九) 毘摩羅詰經 (前照)
- (十) 般舟三昧經 (前照)
- (十一) 阿弥陀經

その他になお多数の大小乗の經典を引用せるものは、また同時代に支那に将来し、翻訳せられていたが今はこれを略する。かく龍樹出世時代には既に共通の多数の大乘經典が東邦に流転せるからは、龍樹出世以前において大乘聖典が出現していたことが確認せらるのである。ここに古龍樹の龍宮入りの神話は後世の密教的影響の結果であることが認めらるであろう。



羅什三藏 (Kumārajīva) の訳出せる「龍樹菩薩伝」(藏九、二四右 A.D.405) によるも、彼は大乘教の創始者たるごとき記事はない。彼よりも以前に世に弘通せられていたる摩訶衍 (Mahāyāna) を広く明らかにして天竺に行わしめたというに過ぎない、いわく

「南天竺において仏教を広め、外道を摧破<sup>さいは</sup>し、広く摩訶衍を明らかにし、優波提舍 (Upadeśa; 論義) 十万偈を作る。また莊嚴仏道論千偈と、大慈方便論五千偈とを作り、摩訶衍の教えを明らかにして、大いに天竺に行わしめ、また無畏論十万偈を造り、無畏中において中論を出す」。

ここに言える「無畏中出中論」とは現存する漢訳の「中論」(Prajñāmūla-śāstra, A.D.409. Kumārajīva の訳) であって、西藏訳では「根本中論無畏疏」(Mūlamadhyama-maka-vṛtti-akuto-bhaya, dBu-Ma-Rtsa-Bahi ḥGrel-pa Ga-Las-ḥIgs-Med; bStan-ḥGyur, mDo-Grel. Tsa. XVII. p.34<sup>a</sup>-114<sup>a</sup>) と名づけられて、西藏仏教史上重要な位置を占めている。漢訳の「中論」の偈頌は龍樹の自作なれど、その疏註は青目菩薩 (Pingala-bodhisattva) の造である。青目菩薩とは西紀四七二年に吉迦夜 (Ke-kiā-ye) と曇曜 (Thān-yāo) との共訳せる「付法藏因縁伝」第六(藏

九、百九右）に出づる迦那提婆（Kānadeva）と同人であるが「\*b」、西藏伝のは偈頌も疏註も共に龍樹の自著であるから、龍樹の中論としては最も重要なものである。

漢訳の「龍樹菩薩伝」には、「龍樹が外道を調伏せしとき外道は王の宮庭で呪術をもって千葉の大蓮華を化成し、蓮華に坐して池中に浮かび、陸庭を隔離して龍樹の跟随こんずいを遮断せんと企てたところ、龍樹はたちまち呪文を念じて六牙の白象を化成し、象鼻をもって外道の坐せる蓮華を破壊せしめ、ついに外道をして彼に屈伏せしめた」という神話的挿話をもってほとんど全半の記事をうすめるのみであるが、そこには何らの密教教理に関する教理や、經典等は記していない。外道呪術の競技談のごときは、当時印度における九十五種外道の常習であるから、仏者も外道に対抗策として呪術をもって応酬論戦するがごとき神話は、ただに龍樹のみに限らないので、普通仏者の外道退治術に用いたる呪話である。故にかくのごとき神話をもって古龍樹は真言密教の祖師とすることは不可である。また龍樹菩薩のこの記事をそのままに「付法藏因縁伝」に襲用してあるから、そこにも顕密二教に関する龍樹伝は存せない。曇曜の訳、「摩訶摩耶經」（Mahāmāya-sūtra, A.D.550-577; Tibetan's; —Sgyu-lhPhrul-chen-pohi Rgyud ces-Bya-Ba, bKah-k-Gyur. Na.）には仏の予言ゃつと、

「仏滅後六百歳にして九十六種外道の邪見競興して仏法を破滅す。一比丘あり、馬鳴という。善く法要を説き、一切外道を降伏す。七百歳の後、一比丘あり、龍樹と名づく。善く法要を説き、邪見の幢<sup>はた</sup>を滅し、正法の炬<sup>たいまつ</sup>を燃やす。」

とて以下、千五百年代に至って仏教衰滅する状態を懸記している。この經典の編纂者は龍樹出世を予言するについても、顕教の古龍樹の伝記としての叙述であって、毫末も新龍樹すなわち真言坦特羅乘に関係する事績に及んでいない。漢訳の年代A.D.550-577を顧慮するも、新龍樹伝に関係していないのはわかるであろう。曇無讖（Dharmakṣema）の訳出したる「大方等大雲經」（Mahāvaiṣṭya Mahāmegha-sūtra A.D.397-439）には、

「善男子よ、我涅槃の後、千二百年にして、南天竺の地に大国王あり、娑多婆呵那（Sadvāhana）と名づく。法滅せんとするに垂<sup>なんな</sup>んして、余四十年、この人爾時まさに中に出でて大乘方等（Mahāvaiṣṭya）經典を講宣し、垂滅の法を拯<sup>じようばつ</sup>拔し、興起し、広くこの經を世に流布せしむ。」

本經の娑多婆呵那（Sadvāhana, Sāvāhana）とは西曆二世紀年代の古龍樹と関係せる娑多婆訶那（Sadvāhana）すなわち玄奘の「西域記」にいろいろ引正王と同名であるが、漢訳の年代よ

り見るも古龍樹時代の王朝の名称である。ただ仏入滅後千二百年の出世という年代のみ差異を生ずるのであるが、本経は娑多婆訶那王の出世によって外道のために衰滅せらるべき仏法を再興するであろうとの懸記であって、龍樹の出世懸記ではない。西藏甘珠爾部<sup>カンギェル</sup> (bkah-hGyur, Pha. 20) の「大雲経」(Arya-Mahā-megha-nāma-mahāyana-sūtra, hPhags-pa Sprin-chen-po Shes-Bya-Ba Theg-pa chen-pohi-mDo) によれば、

「栗荼毘族 (Licavi) の青年、阿難陀 (Ānanda, kun-dGaḥ) なるものを一切有情は難陀 (dGaḥ-Ba) と呼べり。彼は仏滅四百年を経て龍 (Nāga, klu) と名づけらる比丘となり、我が教法を広布せしむ。彼の終わりには歓喜地光 (Sa-Rab-Tu Dan-Pohi-Hod) と名づけらる世界に出現し、如来応供正等智藏光 (tāthāgāta-samyak sambuddha-Jñānākara-prabha) と名づけらるべし」と。

「大方等大雲経」と、この「大雲経」とは懸記の内容において相違するを見れば、この両経は別本であって、あるいは西暦三百八、九十年間のころ(姚秦)竺法念(涼州の人)の訳、「方等無相経」五卷 (Vaipulyālakṣaṇa-sūtra) (欠本)ではないかと思うのである。西暦六世紀年代の月称論師 (Candrakīrti) の「入中道論自釈」[入中論自釈] (Madhyamakāvatārabhāṣya-nāma) の蔵訳 (p.76) に大雲経を引用して古龍樹出世の懸記に擬している。そは懸記年代が「仏滅

四百年」と言えるのと、「龍と名づけらる比丘となりて出現す」といえる文句があるからである。これについて下に至って説明することく、梵文「入楞伽經」の懸記「偈頌品」の *Nāgārvaya* なる語義とは何ら関係を有せないから、したがって大雲經と入楞伽經とはまた無関係であるは言うまでもなからう。ブトン師 (*Bu-Ston*) の善逝宗教史 (*bDe-par-gSégs-paḥi ḥStan-paḥi gSal-Byed Chos-kyi ḥByun-gNas gSun-Rab Rin-po-Cheḥi-mDsoḍ-bShugs-so*; 善逝明教法源流聖訓宝藏史 p.112<sup>b</sup>) にも「大雲經」を引用している。なおこの外に菩提流支の訳、「提婆菩薩破楞伽經中外道小乘四宗論」一卷 (*Śāstra by the Bodhisattva Deva on the refutation of four heretical Hīnayāna schools mentioned in the Lanka-Sūtra. A.D.508-535 Bodhiruci* 訳)、「提婆楞伽經中外道小乘涅槃論」一卷 (*Śāstra by the Bodhisattva Deva on the explanation of the Nirvāna by [twenty] heretical Hīnayāna [teachers] mentioned in the Lanka [—avatāra] sūtra, A.D.508-535. Bodhiruci* 訳) あれど、この二經は「入楞伽經」とはその内容において何らの関係を有せないもので、ただ「楞伽經」という經名を冠せるがために一寸取り迷うものもあるが、二經の内容において前者は外道の六十二見を摧破せしもの、後者は外道涅槃を粉碎せるもので、古龍樹に関する懸記ではない。しかも楞伽經の名称を付せるゆえんは、恐らく提婆論師 (*Āryadeva*) の出生地が錫崙島であるからであらうと思うのである。(F. W. Thomas, *The Hand Treaties, a work of Āryadeva JRAS XIII. p.267, 1918*. 参照)。姚秦の筏提摩多の訳「釈摩訶

「衍論」のごときは龍樹の造とあれど、該書の内容は起信論の疏釈であって密教書ではない。既に新羅の某の偽書なりとの定論もあることである。

## (二) 古龍樹の出世年代

古龍樹の出世年代について、「龍樹菩薩伝」(A.D.405. Kumārajīva) (蔵九、百二十九右) には、

「又南天竺王総ニ御諸国<sup>一</sup>、信ニ用邪道<sup>一</sup>、沙門釈子一不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>見、国人遠近皆化ニ其道<sup>一</sup>。」

「また南天竺の王は諸国を総御し、邪道を信用して、沙門釈子はひとりとして見<sup>まみ</sup>ゆることを得ず、国人は遠きも近きも皆その道に化す」

とあれど王名と年代とを欠く。「付法蔵因縁伝」第五 (Sūtra [or record] on the Nidāna or cause of transmitting the Dharmapiṭaka, Translated by ki-kiā-ye. A.D.472.) (蔵九、百二十右) にも王名

を挙げている。鳩摩羅什は姚秦の弘始三年十二月二十日（A.D.400）、龜茲国より後秦姚興に迎えられ長安に入り、翌弘始四年初めより訳経事業に従事し、正月五日、三昧經（Samadhi-sūtra）を訳し、二月八日阿弥陀經を訳し、その夏、逍遙園において「大智度論」（Mahāprajñāpāramitā-śāstra）一百巻を始め、「中論」（Madhyamaka-śāstra）、「十二門論」（Dvādśanukha-śāstra）、「百論」（Śata-śāstra）、「馬鳴菩薩伝」、「提婆菩薩伝」、「龍樹菩薩伝」を訳出した。したがって羅什は龍樹滅後百年を越えることはなからうかと推定せらるるのである。Hoernle氏は龍樹の年代について左のごとく述べている。

「西暦百八十年ごろに出でたる大使徒は龍樹なり。彼は大乘仏教の最高原理として重用せらる大智度論を著せり。彼の長命の中に新仏教は錫崙島を除くの外、全印度に弘通せられたり。」（History of India, by Rudolf Hoernle. p.52）

イーシー・チャルツァン

西藏史家 Ye-Śes Rgyal-gTshan（A.D.1758-1805）の著「釈迦伝」には「仏滅四百年ごろ、南印度ベンガル湾の辺り、ザホール地において、龍樹は出でて、那爛陀の座主羅睺羅跋陀羅（Rāhulabhadra）に従いて出家し、具足戒を受けたり」とあり。この仏滅四百年説は玄奘「西域記」第三（二六頁）に、迦膩色迦の出世を仏滅四百年とせる説と符合する。西藏史では迦膩迦王（第二世）と、古龍樹とは同時代の出世とする。しかし「西域記」の四百年出世説の

迦王はすなわち第一世であるから古龍樹とは対比することはできない。まして西藏「釈迦伝」のごとく、龍樹を仏滅四百年出世とすることは妥当でない。

西藏史では馬鳴は、提婆とともに龍樹の弟子とする説は西藏史家の定説である。「付法藏因縁伝」では、馬鳴、龍樹、提婆と次第し、西藏史のとは次第相承を顛倒しているだけは相違するも、馬鳴と龍樹とは同時代の前後の出世とするにおいては一致する。「付法藏因縁伝」(蔵九、百六右)に、馬鳴は迦膩迦王(第二世)と同時代の出世としている。

「爾時馬鳴即語レ王言、王能至心聴ニ我説法一、隨順ニ吾教一、頂戴受持、令下王ニ此罪一、不上入ニ地獄一、罽昵吒(王)言、善哉受レ教、於レ是馬鳴広為ニ彼王一、説ニ清浄法一。」

「爾時、馬鳴すなわち王に語りていわく、王よく至心に我が説法を聴き、吾<sup>わ</sup>が教えに隨順し、頂戴受持せば、王をしてこの罪ありとも地獄に入らざらしめん。罽昵吒(王)いわく、よきかな、教えを受けん。ここにおいて馬鳴広く、かの王のために、清浄なる法を説けり」



馬鳴が教化せる闍昵吒（王）とは正しく迦膩迦王（*kanika*）の対音である。迦膩色迦王（*kaṇiṣka*）と迦膩迦王（*kanika*）とは出世年次の次第する二王同名の異人である。迦膩色迦王（*kaṇiṣka*）は龍樹、馬鳴以前出世の第一世であり、迦膩迦（*kanika*）は龍樹と同時代の第二世の王名である。Smith氏は「迦膩色迦王の帰仏は西暦一三五年なり」（*The Early History of India. by Smith. p.243*）と言えり。従来までは、この迦膩色迦王を唯一人なりとのみ認め来たつたのであるが、今は馬鳴が第二世迦膩迦王に送つたる西蔵訳文（丹珠爾部）が存している史料によつて第一世と第二世迦王の存在の区別を確かめるを得たのである。（拙著西蔵語文法、参照、迦膩迦王の馬鳴に送れる書翰）

馬鳴は自己の著、「大乘莊嚴論經」（*Mahālaṅkāra-śāstra-sūtra, A.D.405. Kumāragīya* の訳）の中に、自己の著、「仏所行讃」（*Buddhacarita-kāvya, A.D.414-421. Dharmakṣema* の訳）を引用して、迦膩迦王の事跡を叙述している。また吉迦夜（*ki-kiā-ye*）と曇曜（*Tān-yao*）との共訳、「雑宝藏經」第七（*Samyuktaratna-piṭaka-sūtra, A.D.472*）（宿十、三二）にも、闍昵吒王の事跡を記していわく、

「時月氏国有<sup>レ</sup>王、名<sup>ニ</sup>梅檀闍昵吒<sup>一</sup>、与<sup>ニ</sup>三智人<sup>一</sup>。以<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>親友<sup>一</sup>、第一名<sup>ニ</sup>馬鳴菩薩<sup>一</sup>、第二大臣字<sup>ニ</sup>摩吒羅<sup>一</sup>、第三良医字<sup>ニ</sup>遮羅迦<sup>一</sup>、如<sup>レ</sup>此三人王所<sup>ニ</sup>親善<sup>一</sup>」。

「時に月氏国に王あり。梅檀闍昵吒と名づく。三智人ともつて親友となす。第一は馬鳴菩薩と名づく。第二は大臣にして摩吒羅<sup>マータラ</sup>と字す。第三は良医にして遮羅迦<sup>チャラカ</sup>と字す。かくのどとき三人、王の親善するところなり」

「梅檀闍昵吒王」とは Caṇḍa-kanika 王の対音であらう。Caṇḍa は fierce, terrible, fearful, violent の意義を有するから強暴なる迦膩迦王、猛烈なる迦膩迦王とでも訳すべきもので、迦王の政治的治績における強大勇猛の性格を表わす頌德的形容詞であらう。いずれにしても迦膩迦王（第二世）の親友として馬鳴の外になお二人あり。馬鳴はその第一位を占めたのである。そして良医なる遮羅迦とはいかなる侍医であるか。「付法藏因縁伝」第五（藏九、六六五）によれば、

「復有<sup>二</sup>一医<sup>一</sup>、名曰<sup>二</sup>遮勒<sup>一</sup>、善解<sup>二</sup>方藥<sup>一</sup>、聡敏多聞、利智弁才、慈和仁愛、闍昵吒<sup>カニタ</sup>王、素聞<sup>二</sup>其名<sup>一</sup>、每常推覓。」

「また一医あり、名づけて遮勒もとという。善く方藥を解し、聡敏多聞、利智弁才、慈和仁愛。罽泥吒王、素もとよりその名を聞き、每常つねに推し覓もとむ」

この一医の「遮勒」とは「雜寶藏經」の「遮羅迦」の対音であろう。Smith氏は印度歴史に述べて言えり。

「龍樹と馬鳴と、医術のCharakaとは迦膩色迦王（Kanishka）時代に住めりといわると。

この遮勒とはCharakaと名づけらる侍医と同人であることを知る。Waddell氏は龍樹と迦膩迦王（第二世）の關係を記して言えり。

「絵画説の初歩は二世紀に生存したる龍樹に帰せらる。彼（星海の方）にScythianの迦膩色迦王の保護を受けたり。吾人は王が仏教建築の裝飾ある多数中に画師を使用したということを玄奘によって知り得たのである。」（Lamaism, by Waddell. p.108）

「大毘婆沙論」第二百（Abhidharma-mahāvibhāṣā-sāstra, A.D.656-659, Hsien-Tsang [玄奘] 訳）と、「大慈恩伝」第二（Life of the teacher of the law of Tripiṭaka who lived in the Tāshanzan [great

compassionate-favour] monastery, i.e, Hsien-Tsang.) に出づる仏滅第四百年代出世の迦膩色迦王なるものは、すなわち第一世の迦膩色迦王である。玄奘の「西域記」第三卷（二六丁）の迦湿弥羅国の条に「健駄邏国迦膩色迦王、以如来涅槃之後、第四百年<sup>一</sup>、応下期<sup>二</sup>撫運<sup>三</sup>、王風遠<sup>上</sup>」。「健駄邏国<sup>上</sup>の迦膩色迦王は、如来涅槃の後、第四百年をもつて、期に<sup>したが</sup>応じ、運に<sup>したが</sup>撫いて、王風は遠く<sup>おお</sup>（被つ）」といえるものもまたこれ第一世の迦膩色迦王である。そして龍樹時代の王をもつて第二世とし、もつて龍樹と馬鳴と提婆とに關係す。この第一世と第二世との相違は王名についてただ「色」(ś)の一字の有無によつて判別せらる。すなわち前者は迦膩色迦王(Kaṇiśka)と呼び、後者を迦膩迦王(Kanika)と称せらる。これ後世歴史家が迦王を唯一人なりと誤認せし結果、この二王間にかかる差別を認めざるに至つたのである。ターラナータ史第十八章「馬鳴の時代」(p.71)にいわく。

「(この時) 西方 Tili と、 Malaya との国に青年の迦膩迦王 (Kanika) は王位に任命せられ、王は新たに宝鉞二十八ヶ所を発見し、富裕に生活し、四方に各大伽藍を建立し、大乗の比丘三万人を常に供養せり。この故に迦膩色迦王 (kaṇiśka) と、迦膩迦王 (kanika) とは同一ならざるを了解せんことを要す (Rgyal-po kaṇiśka Dan kanika Mi-gCig-par Go-dGos-So)」云。

この迦王二人説について Anton Schiefner 氏も同様に言っている。

als im Westen im Lande Tili und Malava ein an Jahren junger *König Kanika* in die Herrschaft gewählt wurde. .... dass der König *Kanischka* und *Kanika* nicht eine und dieselbe Person sind. (*Tāranātha's Geschichte Des Buddhismus*, p.89-90)

「西方のティリおよびマリヴァの地において、若年の王カニカが統治者として選ばれた。.....したがって、王カニシカとカニカは同一人物ではないことを知らねばならぬ」

同史同章 (p.72) に、馬鳴は龍樹の弟子阿利耶提婆 (Āryadeva) に教化せられ、仏門に入り、「百五十讚」 (*Satapañcāśatka-nāma-stotra*) 等を著して仏徳を讃称したる記事あり。これによりて龍樹は迦膩迦王 (第二世) 時代において、提婆、馬鳴、龍猛 (龍叫) とほとんど同時代の師資相承の關係を保っていたことを認めらるであらう。

上に引用せる「摩訶摩耶經」に、仏の懸記として龍樹の出世を仏滅七百歳の後なりとせる説は、ヴェンセント・スミス氏の仏滅年代を西暦前四百八十七年説や、「衆聖点記」の推定

説、西暦前四百八十五年説に比較すれば、龍樹は西暦二世紀年代の出世となる。スミス氏の迦膩色迦王の帰仏を西暦百三十年なりと（古代印度史二四三頁）せる迦王はすなわち第二世の迦王である。

龍樹の著、「大智度論」、「十住毘婆沙論」（*Daśabhūmi-vibhāṣa-sāstra*, A.D. 405, Kumārajīva の訳）等における思想は大無量寿経、阿弥陀経等の浄土思想によつて構成せられてあるので、大無量寿経は西暦二五六年に康僧鎧（*Saṅgha-varman*; 康とは *Kokand* 国）によつて訳出せられてゐるから、龍樹は少なくとも大無量寿経の漢訳時代の前後において出現せしものと見なければならぬ。ケルン氏は龍樹について述べていわく。

「大乘經典大無量寿経が西暦百四十八年より百七十年間に初めて漢語に訳されたということを記すれば足る。また迦膩色迦の下に行われた結集のころに生まれた龍樹は大乘教の創建者であるという伝説もまた正確であるなれば、前記の経は新宗教で編成し、また採用したる第一番の書のひとつであつたに違ひない」（*Manual of Indian Buddhism*, by

Heinrich Kern. Introduction, c. p.10）

ヘルンレー氏は、迦王（*Kanishka*）の下に聖典の結集が *Punjab* の *Jalandhar* 地にて開催せられた、そは大乘の聖典結集である。詩人で監督である馬鳴（*Asvaghosha*）は迦王と同時代の

もので、仏所行讚 (Buddhacarita) を著した。ほとんど A.D. 110 に大使徒にして有名なる龍樹 (Nāgārjuna) が、「大智度論」 (Prajñāpāramitā) を造ったと。(A History of India, by Hoernle, p. 51)

以上の史料を総合して考うるに龍樹の出生年代は西暦二世紀ごろにして、「付法藏因縁伝」 (A.D. 472. 吉伽夜・曇曜共訳) に出づる龍樹も、また「龍樹菩薩伝」に出づる龍樹も、等しく頭教に属する龍樹であることは疑いがないと思う。

### (三) 古龍樹の名義について

龍樹伝に関連して、龍宮物語、または龍神譚の発生するゆえんは、由来印度神話として早き時代より発生し、支那にては周書等に出ているが、印度では殊に西暦一世紀半に至つては仏教保護神として無数の龍神話を有する經典が簇<sup>そうしゆつ</sup>出するに至つたのである。げに有史以前に爬虫類がこの世界を横行せし時代には、人間を始め、他の動物を脅かした記憶が何百万年と生物の骨身に浸潤して消えない。實際頭から尻尾まで二十間以上もあるうという蜥蜴<sup>とかげ</sup>みたいな怪物がのたうちまわった光景は、生物界の恐怖であつたに相違ない。元来那伽 (Nāga) の

神話は、那伽族すなわち龍蛇を崇拜した那伽族を神話化したものである。那伽族は一時勢力を有し、その王は南印度の末土羅 (Mathura) 、鉢土摩婆抵 (Padmavati) 等の諸州を領有し、現今の那伽補盧 (Nāgapur) は「那伽市」の義で、那伽族にその名の起源を有し、印度西部の高原地にも今なお生住している那伽族と称するもので、印度人種学上においてはこれ恐らく塞種族 (Seythic race) に属するものであろう。

龍樹の名義——西暦四〇七年代に羅什の訳出せる「龍樹菩薩伝」(蔵九、二四右)、元魏の吉迦夜と、曇曜の共訳なる「付法蔵因縁伝」(蔵九、四七右 A.D.472) 、Wassiljew's Buddhismus (p.212) 等には龍樹の訳名をもって記載せられているが、龍樹(龍勝)の著書「順中論」(Madhyāntanugama-sāstra) の無著(Asaṅga)の釈を元魏の瞿曇般若流支(Gautama prajñāraci, A.D.543)が訳出せる序文には、

「諸国語言、中天音正、彼言那伽夷離淳那、此云<sup>二</sup>龍勝<sup>一</sup>、名味皆足、上世徳人、言<sup>二</sup>龍樹<sup>一</sup>者、片合一廂、未<sup>二</sup>是全当<sup>一</sup>。龍勝菩薩通法之師、依<sup>二</sup>大般若<sup>一</sup>、而造<sup>二</sup>中論衆典<sup>一</sup>。」

「諸国の語言あれど、中天の音、正し。かの言に那伽夷離淳那、これを龍勝という。名味、皆足れり。上世の徳人が龍樹と言うは、片えに一廂に合すのみ、未だこれ全きに当



.....  
たらず。龍勝菩薩は通法の師にして、大般若に依りて、中論衆典を造れり  
.....

慧晃の著「枳橘易土集」(三二)には「順中論」、「釈迦方誌」、「西域記」、「楞伽經」の龍樹に関する語源を集めている。いわく。

「順中論翻譯之記云、那伽夷離淳那(Nāga-Virajuna)、此云龍勝<sup>一</sup>、菩薩名也。

釈迦方誌云、那伽闕刺樹那菩薩、此云龍猛<sup>一</sup>、或云龍樹<sup>一</sup>。

西域記第八云、南印度、那伽闕刺樹那菩薩、唐言龍猛<sup>一</sup>、旧訳曰龍樹<sup>一</sup>非也。

楞伽經(十卷之本第九)云、大慧汝応<sup>レ</sup>知、善逝涅槃後、未來世、当<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>持<sup>二</sup>於我法<sup>一</sup>者、南

天竺國中、大名德比丘、厥号为龍樹<sup>一</sup>、能破<sup>二</sup>有無見<sup>一</sup>、得<sup>二</sup>初歡喜地<sup>一</sup>、往<sup>二</sup>生國<sup>一</sup>。或

名<sup>二</sup>龍勝<sup>一</sup>、或名<sup>二</sup>龍猛<sup>一</sup>、立<sup>レ</sup>名雖<sup>レ</sup>異、其体無<sup>レ</sup>殊。

この続きは製品版にてお楽しみください。